

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K06404

研究課題名(和文)ルネサンスの理想都市に見る中近世の都市空間の変容に関する研究

研究課題名(英文)A study on the transformations of urban space between the medieval and the early modern periods

研究代表者

片山 伸也 (KATAYAMA, Shinya)

日本女子大学・家政学部・准教授

研究者番号：80440072

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：商業中心地の広場や通り、水路に付随していた中世後期のポルティコが、近世以降は次第に取り壊されながらも大聖堂や市庁舎の広場など都市の中心地に多く残ったことが分かった。フィレンツェなどのイタリア中部の都市に見られるロτζィアは国賓の入場儀式の際に観覧する場として利用されたが、近世以降のポルティコとロτζィアに建築的共通点が見られることから、近世以降の都市空間の変容の中で、ポルティコのロτζィア化が進行していたと考えることができる。本研究では、中世都市のポルティコ空間がルネサンス期以降ロτζィア空間として建築的に翻訳されたことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ルネサンスの建築文化は、人文主義あるいは古典主義の側面を強調するために中世までの建築文化から切り離して解釈されがちである。しかし本研究では、中世後期からの都市空間の歴史的連続性に鑑みて、中世の都市空間の「現代的(ルネサンス的)」再解釈として緩やかに進行したことを、具体的な都市の構成要素であるポルティコの分布状況と建築類型から明らかにしたことに意義があると言える。

研究成果の概要(英文)：The late medieval porticos, which stood on squares, streets, and waterways near commercial centers, were demolished in succession since the early modern period. However, the fact that many porticos remained in the center of the city, such as the square of the cathedral and the city hall. In Florence and other cities in central Italy, the loggia was built as the place to watch the entrance ceremony of state guests. Since there are architectural similarities between the early modern portico and loggia, it can be considered that the loggianization of the portico was proceeded among the transformations of urban space in the early modern period. This study shows that the portico space of the medieval city was architecturally translated as a loggia space after the early modern period.

研究分野：イタリア都市史

キーワード：イタリア 中世都市 ルネサンス ポルティコ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

イタリアのルネサンス期「理想都市」については、建築史研究あるいは都市史研究の中である特異点として捉えられており、都市形成史の流れの中に位置づけられては来なかった。それは何よりも事例に欠けていたからであり、既往研究でも、ルネサンス以降の人文主義的あるいは科学技術的な視点を前提として、近代都市計画の萌芽と捉える視点から論じるか、築城術と人文主義の視点から論じるものが多く、中世の都市空間との本質的な相違、あるいは既存都市組織との建築的摩擦についての論議は避けられている。

しかし、ルネサンス期の都市改造すなわち「理想都市」の実現は、既存の中世都市に対する介入として行われた。したがって、中世末の都市組織を前提とした「理想都市」の全体像が想定されたはずであり、そこに中世都市空間の「現代的」な読替えがあったはずであるというのが、本研究の仮説的前提である。

2. 研究の目的

本研究では、これまで「理想都市」と見做されてこなかったものも含めてルネサンス期の都市改造の事例を収集し、中近世の都市空間の変容について検証分析を行うことで、既存の中世都市組織がどのように解釈されてルネサンス期の都市改造が計画・実施されたのか、言い換えると中世都市を内包しながらどのような「理想都市」が計画され、どのように実現したのかを明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

ルネサンス期に改変されたことで知られる都市フェラーラと共にエステ家の支配拠点であったレッジョ・エミリアについて、ポルティコと呼ばれる列柱廊空間の分布および建築的特徴を分析することで、中世後期からルネサンス期にかけての都市空間の変容を考察した。

レッジョ・エミリアの歴史的な中心地区の全ての街区の様相を、先行研究や都市計画資料、古地図を合わせて、都市形成過程と街区の統計データから明らかにした。また、ポルティコの有無を都市計画資料と現地調査から特定し、ポルティコの類型化と共に都市内での分布や建物種類、タイプ、時代様式をまとめたポルティコ・データベースを作成し、国立レッジョ・エミリア公文書館に収蔵されている史資料とともに比較考察を行った。

4. 研究成果

(1) 研究経過

平成27年度はルネサンス理想都市に関する基本文献・資料の収集を行い、特にフェラーラについて、市立図書館および国立古文書館において歴史的な中心部における現況調査資料ならびに通史資料の収集を行った。その中で、16世紀以降のエステ家の統治と都市改造の関係について着想するに至り、同じくエステ家が統治する都市であったモデナおよびレッジョ・エミリアについても現況調査資料ならびに通史資料の収集をそれぞれ市立図書館等にて行った。

平成27年10月に、フェラーラ、モデナおよびレッジョ・エミリアの現地調査を行い、入手した実測平面図等の資料分析から、中世後期から近世にかけての都市形成と政府による都市整備の関係を検証する媒体として、ポルティコ(通り及び広場に沿って連続する列柱廊)に着目することとなった。また、比較対象都市の選定作業として、北イタリアにおけるパラッツォと街路空間の実態を俯瞰するための現地調査を行い、中世後期の都市条例における街路に関わる規制についての文献調査を行った。

平成28年度は、フェラーラ、モデナ、レッジョ・エミリアの3都市について、資料収集と現地調査を行った。フェラーラは教皇領であったため、近代化以前の市街地の状況を示す史料としてローマ教皇グレゴリオ16世によって1835年に編纂された地籍図“Catasto Gregoriano”を入手して歴史的な中心地区の分析の基礎資料とした。また、エルコレ1世による都市拡張に関する近年の研究結果に関する刊行資料を収集した。17世紀以降のエステ家の拠点であったモデナおよびレッジョ・エミリアについては、自治体提供のGISデータをもとに分析を行った。特に、レッジョ・エミリアについては、歴史的な中心地区の平面形式による建築類型、様式的特徴の分析データと地籍図も入手し、昨年度入手した18世紀の古地図史料とともに分析の基礎資料とした。

レッジョ・エミリアの都市空間に関する分析としては、都市形成過程と建築類型の分布状況の比較、古地図史料との比較による都市構造の復元的考察、現在のレッジョ・エミリアの社会統計データとの比較から、街区ごとの社会階層と都市構造の関係について分析を行った。更に、都市の公共空間(通りおよび広場)と居住空間を結びつけるポルティコについて、構造的な特徴と様式的特徴をデータベース化し、上述の都市構造の分析と対応させて相関性を考察した。

また、ローマにおける中世からルネサンス期の都市空間の変容として、ジュリア通り周辺の都市組織の分析を行った。基礎資料としてローマ大学建築学部作成の実測平面図を用い、平面形式の類型化とファサード構成要素の相関性の分析および近代化以前の状況を示す史料としての地籍図“Catasto Gregoriano”をここでも併用し、同時期に開通したルンガーラ通りおよびリペッタ通りと比較しながら、都市組織におけるジュリア通りのルネサンス性を考察した。

平成29年度は、ローマに関する中世からルネサンス期にかけての都市空間の変容に関する昨年度の分析から発展して、ルネサンス期の直線道路の開通とバロック期の直線道路の開通に関する文献研究を行った。都市組織の比較に加えて、絵画資料の分析から、透視図法の効果と一般

に指摘されるバロック期の直線道路の敷設に、消失点にモニュメントを設置するアイレベルでの透視図法的視点と上空から俯瞰する視点の二種類があり、17世紀までのローマにおいては、主として直線道路の端部にモニュメントを設置する前者の視点が主であったことがわかった。一方で、後者の俯瞰的視点の流布は鳥瞰的都市図を通して進行したと考えられ、その影響の範囲については今後の研究課題と言える。中世都市組織のルネサンス期の変容については、イタリア北部のポルティコ空間に着目して、昨年度までに得られた現地調査のデータおよび文献資料に基づく都市条例からの考察を行った。特にヴェネト地方の中世後期におけるポルティコ空間の使用実態ならびに官民の管理区分についての分析を進めた。その中で、ポルティコ空間が公共の歩行空間の確保だけでなく商業ならびに手工業のための私的活動のための空間であったことが明らかになる一方で、14世紀には商業の発展にともなう自治都市の発達によって中央集権化が進み、都市の中心広場(市場広場)にパラッツォ・デッラ・ラジョーネが建設され、一部の商業活動もそこに収斂される。パドヴァのパラッツォ・デッラ・ラジョーネはアンドレア・パラディオによって古代ローマのバシリカとの類似性も指摘され、ルネサンスにおける主要な都市施設のプロトタイプとなっている。このようなポルティコと街路空間の連続から中心広場への商業機能の集中とモニュメント的建築の出現は、中世からルネサンスにかけての都市空間の変容の一側面と捉えうるものと言える。

平成30年度は、これまでに収集した文献資料による分析を中心に行った。また、9月にはフィレンツェ、ヴェネツィア、レッジョ・エミリアにて資料の追加収集と街路空間の補足調査を行った。フィレンツェについては塔状住宅の立面調査を行い、これまでにを行ったルネサンス期パラッツォのファサード類型との比較分析を行った。また、類型と分布の相関性をルネサンス期フィレンツェの入市式に関する赤松の先行研究を参照しながら考察を行った。レッジョ・エミリアについては、これまでに収集した地籍図および連続平面図をもとに、ポルティコの類型化とその位置について再度検証し、レッジョ・エミリアの都市形成過程との相関性について分析するとともに、ルネサンス期におけるポルティコのロジック化についての考察を行った。

ルネサンス期の建築論についてはAISU(イタリア都市史学会誌)、SAH(米建築史学会誌)を中心に先行研究の収集を行った。建築史上の建築家という職能については、15・16世紀のイタリアでアルベルティらによって社会的に地位の高いものとして位置づける一連の動きが指摘されているが、理想都市論の展開に大きな影響を与えた特に16世紀以降の軍事建築家たちの理論とそれ以前の「建築家」たちとの思想的相違については未だに十分に考察されていないと言える。ウィトルウィウスの建築論における理想都市と軍事技術的理想都市については、パルマノーヴァおよびマルタ島ヴァレッタに関する先行研究から考察を行った。

(2) レッジョ・エミリアの都市形成過程

レッジョ・エミリアは古代ローマの植民都市として建設され、中世初期から都市中心部に位置する司教座聖堂を中心として城塞的集落が形成された。その後の教会の設立と位置から、レッジョ・エミリアの歴史的な中心部の市街地化の課程は、図1のように推定することが出来た。

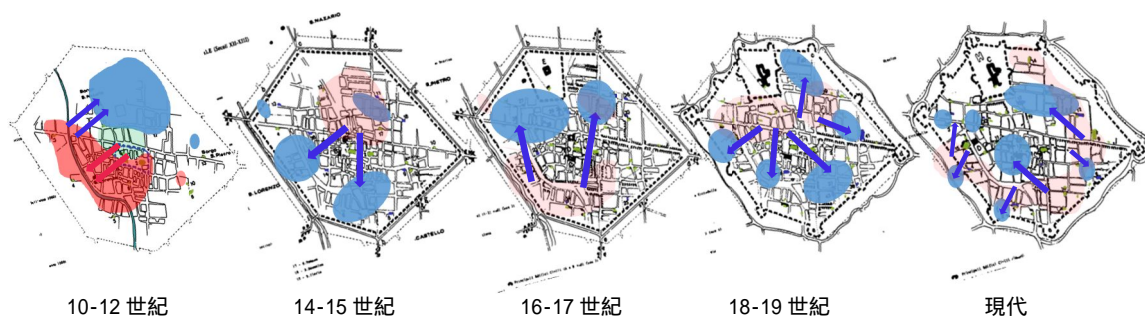


図1 レッジョ・エミリア都市内の居住域の変遷

教会が位置する場所は、都市中心部や大きな広場、公園の近くであり、主要な場所に建設されたことが考えられる。18,19世紀には、ナポレオンの命令によって多くの教会施設が収用されたが、残った教会の多くは中世期に建てられたものであった。北西に位置するかつての要塞(Cittadella)周辺は、古代から中世にかけて都市が縮小した時期には湿地帯となっており、近世までこのエリアだけ市街地化されること無く、要塞を中心とした軍事施設であった。

ポルティコが設けられている建物としては、エミリア街道を挟んで南側とフォンタネージ広場の東側に住宅が集中している。また、都市北部にはポーチのポルティコを持つ公共建築が、またフランポリーニ広場にはポルティコをもつ市庁舎や主要な聖堂が建っており、歴史的なポルティコが設けられている建物はエミリア街道以南に集中していた。

レッジョ・エミリアの都市計画資料を元に、歴史的な中心部全ての建物の建設時および改変、現状の時代様式を分類し、ポルティコの分布との相関性を分析すると、新古典主義の様式に改変を受けたポルティコの設けられている建物は、現状も様式の変化がないことがわかった。18世紀にエミリア街道の北側のポルティコが撤去されるが、都市の新古典主義による再建が活発化する

るとポーチ的なポルティコが再度評価されるようになったと考えられる。

(3) ポルティコの類型

都市内のポルティコを構成する要素として、ポルティコのアーチの形状、アーチの構造、アーチ高、柱材に着目し類型化を行った(図2)。



図2 レッジョ・エミリアのポルティコの類型

類型化したポルティコの分布をみると、レッジョ・エミリアのポルティコは公共建築や富裕層の建築に使用されている格調を示すような装飾的なポルティコ、一方で庶民住宅の歩行空間および店舗や職人の工房として利用されていたポルティコがあると考えられる。類型(1)は、都市の中心的な広場やエミリア街道に面しているものが多く、店舗入り口としての利用が多い。類型(2)は、都市の中心を通るエミリア街道の東側、サン・カルロ通りの南側に分布し、住宅の入り口としての利用が多い。類型(3)の装飾のあるポルティコは格式や権威を協調するような機能があり、教会などの公共建築に利用されている傾向にあるが、類型(4)は(3)と要素に近いものの、公共建築に使用されているものは少なく、アーチ高が低いものが多かった。

都市内での分布とポルティコの付随する建物の建築様式や都市形成過程との関連性を分析すると、エミリア街道沿いに近世以降の装飾性が高いポルティコが多く分布すること、都市南部に簡素なポルティコの類型が集中しており、中世の商手工業活動が盛んだったエリアと一致すること、都市北部の19世紀に新たに開発されたエリアに新古典主義的ポルティコが建設されており、当時ポルティコが北部のアイデンティティとして認識されていたことが明らかになった。

(4) ポルティコの変質

レッジョ・エミリアの歴史的な中心地区における時代ごとのポルティコの分布と類型を比較し、時代の変遷におけるポルティコの変化を分析した(図3)。図から、中世後期からルネサンス期にかけて顕著にポルティコが消滅していることが分かる。

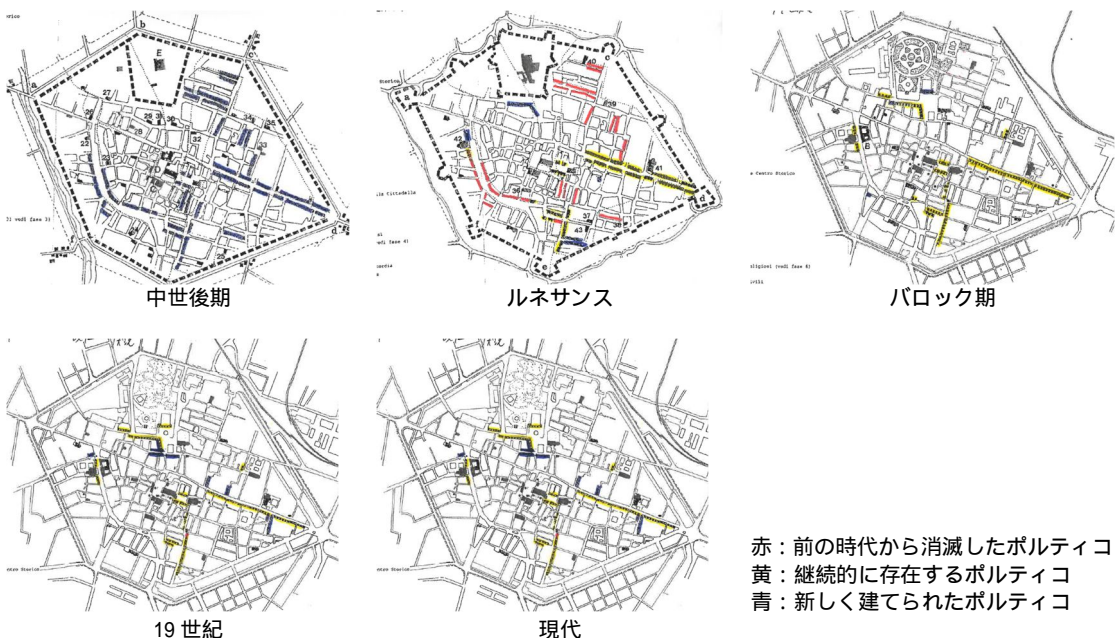


図3 レッジョ・エミリアの都市形成とポルティコの分布(文献 に筆者加筆)

13 から 18 世紀の間に、都市の西南方向に位置するコルソ・ジュゼッペ・ガルバルディ沿いのポルティコと北東の通りのポルティコが消滅している。コルソ・ジュゼッペ・ガリバルディ付近は、元はクロストーロ川が都市の内を流れていたが 12 世紀以降は都市の城壁内側に沿って埋め立てが行われ、15 世紀には河川が大きく縮小し、17～18 世紀には水路として形を残していた。都市の北東に位置する通りの周辺には、水車や紡績所隣接地があった。ポルティコが付随する街区には近接して水路が通っていることが分かる。例えば、肉製品を扱う商店などは衛生的な問題が発生するため、水路に血などの汚物を流すことで衛生的な営業を実現していた。また、紡績所では水の力を用いて羊毛などの糸を紡いでいた。これらは、レッジョ・エミリアの街区にとって非衛生的であったため、水路に付随するポルティコは消滅したと考えられる。さらに、エミリア街道沿いのポルティコはかつて通りの両側に建てられていたが、18 世紀後半には非衛生的で機能的ではなくポルティコの下は暗くて治安が悪いという理由から、北側のポルティコが破壊されている。

このようにレッジョ・エミリアでは、中世後期のポルティコは商業中心地の広場や通りに付随していたが、近世以降は大聖堂周辺の広場など都市の中心地に多く残ったことが分かった。フィレンツェなどのイタリア中部の都市では、ロτζィアと呼ばれる列柱で囲まれた庇空間を公共の広場や街路に面して建設することがある。このような広場に面したロτζィアは、国賓の入場儀式の際に観覧する場として利用された。中世後期から 18 世紀にかけて、水路や通りに付随していた多くの中世的なポルティコが減少する一方で、大聖堂や広場の市庁舎などの都市中心部のポルティコが近世以降も残ったこと、またその形態にロτζィアとの共通点が見られることを考慮すると、近世以降の都市空間の変容の中でポルティコのロτζィア化が進行していたと考えることもできるだろう。

本研究では、中世都市のポルティコ空間がルネサンス期以降ロτζィア空間と建築的に翻訳されたことを示したが、「理想都市論」にみられるような全体秩序の創出については十分に考察できていない。都市の輪郭あるいは街路システムを規定するための都市空間の再解釈がどのように進んだのかを明らかにすることが今後の課題である。

<参考文献>

AA.VV., “La Memoria Della Città. Ricerca Interdisciplinare Sul Centro Storico Di Reggio Emilia”, Comune di Reggio Emilia, 1981
Badini, G. (care of), “Atrante Storico Reggiano. Giovanni Andrea Banzoli 1668-1734”, Reggio Emilia, 1985

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 片山伸也	4. 巻 424
2. 論文標題 レッジョ・エミリアのポルティコ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地中海学会月報	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	青木 香代子 (AOKI Kayoko) (00597065)	日本女子大学・家政学部・研究員 (32670)	
研究 分担者	赤松 加寿江 (AKAMATSU Kazue) (10532872)	京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・准教授 (14303)	